

復活節第7主日 ヨハネ17章1―11節

〔直訳〕

- 1 これらのことを 語った イエスは  
そして 上げて 彼の目を 天へと 言った、  
「父よ、 来た 時が。  
栄光を与えてください あなたの子に、  
ようにと 子が 栄光を与える あなたに、
- 2 とおりに あなたが与えた 彼に 権威を すべて  
の肉に対する、  
ようにと すべてのももの ところの あなたが与えた 彼に 彼が与える  
彼らに いのちを 永遠の。
- 3 だがこれが ある 永遠の いのちで  
こと 彼らを知る あなたを 唯一の 真の 神を  
そして あなたが遣わしたところの イエス・キリストを。
- 4 私は あなたに 栄光を与えた 地の上で  
業を 完成して ところの あなたが与えた 私に ようにと 私が行う。
- 5 そして 今 栄光を与えてください 私に あなたが、  
父よ、 あなた自身のもので
- 6 栄光で ところの 私が持っていた 世がある前に あなたのもので。  
私は現した あなたの 名を 人々に  
ところの あなたが与えた 私に 世の中から。  
あなたのもので 彼らがあつた  
そして私に 彼らを あなたは与えた  
そして 言葉を あなたは守っている。
- 7 今 彼らは知っている 次のことを  
すべてのものは ところの あなたが与えた 私に  
あなたのもことから ある。
- 8 なぜなら ことばを ところの あなたが与えた 私に  
私は与えた 彼らに、  
そして 彼らは 受け取った  
そして 知った 真に 次のことを  
あなたのもことから 私は出て来た、  
そして 彼らは信じた 次のことを あなたが 私を 遣わした。
- 9 私は 彼らのために 願う、  
でない 世のため 私は願う そうではなく

者たちのために あなたが与えた 私に、  
なぜなら あなたのもので 彼らはある、  
10 そして 私のものはすべて あなたのもので ある  
そして あなたのもものは 私のもの、  
そして 私は栄光を与えられている 彼らの中で。  
11 そして もはやない 私はある 世の中に、  
そして 彼らは 世の中に ある、  
そして私は あなたのもとへ 行く。  
父よ 聖なる方よ、  
あなたは守ってください 彼らを  
名の中で あなたのところの あなたが与えた 私に、  
ようにと 彼らがある 一つで とおりに 私たちが。

【新共同訳】

1 イエスはこれらのことを話してから、天を仰いで言われた。「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えてください。2 あなたは子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのために、子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができます。3 永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。4 わたしは、行うようにとあなたが与えてくださった業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。5 父よ、今、御前でわたしに栄光を与えてください。世界が造られる前に、わたしがみもとで持っていたあの栄光を。6 世から選び出してわたしに与えてくださった人々に、わたしは御名を現しました。彼らはあなたのものでしたが、あなたはわたしに与えてくださいました。彼らは、御言葉を守りました。7 わたしに与えてくださったものはみな、あなたからのものであることを、今、彼らは知っています。8 なぜなら、わたしはあなたから受けた言葉を彼らに伝え、彼らはそれを受け入れて、わたしがみもとから出て来たことを本当に知り、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じたからです。9 彼らのためにお願いします。世のためではなく、わたしに与えてくださった人々のためをお願いします。彼らはあなたのものであるからです。10 わたしのもものはすべてあなたのもので、あなたのもものはわたしのものです。わたしは彼らによって栄光を受けました。11 わたしは、もはや世にはいません。彼らは世に残りますが、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください。わたしたちのように、彼らも一つとなるためです。

① 「これらのことを語った」

② 13章30節には、イスカリオテのユダがイエスから「パン切れを受け取ると、すぐ出て

行った。夜であった」と述べられている。その直後、イエスは「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった」と語り、自分が弟子たちから離れて行くことを告げる。この31節から世を去るイエスが弟子に残した「告別説教」が始まると見られている。34―35節では、イエスは弟子たちに新しい掟を与え、「互いに愛し合いなさい」と命じるが、36―38節にはペトロの離反の予告が挿入されており、14章1節から「告別説教」が本格的に展開される。「告別説教」は16章まで続き、その直後の17章では、「これらのことをイエスは語った、そして彼の目を天へと上げて言った」と始まり、イエスが後に残す弟子のために祈りをささげる。

⑥イエスの祈りは17章の終わり（26節）まで続く。イエスが祈り終えると、ユダに引き連れられた兵士たちは、「松明やともし火を手にして」、イエスを捕らえにやってくる（一八3）。パン切れを受け取って、「夜」イエスのもとから離れ去ったユダは、松明を手にした世の闇と共に、イエスを捕らえるために近づく。「松明やともし火を手にして」という表現は共観福音書（マタイ・マルコ・ルカ）には見られない。イエスの「告別説教」は、13章30節の「夜であった」と18章3節の「松明やともし火を手にして」に挟まれる形に配置されている。このように配置することによって、「告別説教」が語られる家の外は闇の支配にあることを暗示している。

## ② 「時が来た」

①「ここでの「時」とは、イエスが十字架の死によって父のもとに帰る時を指す。その時、父なる神は子なる神に栄光を与え、子なる神は父なる神に栄光を与える。

②ヨハネ2章の「カナの婚礼」では、「ぶどう酒がなくなりました」と告げる母に、イエスは「わたしの時はまだ来ていません」と語る。「わたしの時」とは、栄光を受ける時のことだが、それは十字架に上る時のことを指す。十字架における死と復活を通してイエスは、父なる神といっそう親密な関係に入るが、その「時」が来るまでは、父なる神の許しなしには何事も行わない。しかもその「時」を決めるのは神であり、イエスでも母でもない。こうしてイエスは母の要求にそえないことを述べ、この危機を乗り越えられるかどうかは、すべて神にかかっていることを示す。イエスは「何が私とあなたに」と答えるが、これはヘブライ語的な表現であり、ここでは「この仕事は我々の仕事ではない」を意味するだろう。このように応えることによって、イエスは母の心を神へと向けようとする。

③「わたしの時」「イエスの時」は「まだ来ていない」という表現は、2章以降では、7―8章に現れるが（七6・8・30、八20）、12章23節の「人の子が栄光を受ける時が来た」を境にして、その後は「イエスの時が来た」ことが述べられていく。

## ③ 「すべての肉に対する権威」

①「すべての肉」、「肉なるすべてのもの」はセム語的表現であり、「全人類、すべての人間」を表す。父なる神は子なる神に「すべての人間に対する権威」を与えた。その権

- 威とは、「父が子に与えたすべての者に、永遠のいのちを与える」ためのものである。
- ⑤「永遠のいのち」とは、「唯一の真の神であるあなたを、そしてあなたが遣わしたイエス・キリストを人々が知る事」である。「知る」は現在形で書かれているが、それは絶えることのない過程の意味を含んでおり、「知っていく」という意味になる。
- ⑥ヨハネにおける「知る」とは単なる知識ではなく、神とキリストとの人格的交わりを意味する。神を「知る」とは、神についての思弁的な知識を持つことではなく、神を信じ、その信仰にふさわしく生きることを表す。ヨハネの手紙一では、『神を知っている』と言いながら、神の掟を守らない者は、偽り者で、その人の内には真理はありません（1ヨハ二4）と述べられている。キリスト者は神とキリストを「知って」生きる者である。「神を知る」とは、神が人を愛したように、互いに愛し合うという掟を守って生きることである。

④「業を完成して、私は地上であなたに栄光を与えた」

①「完成する」と訳した動詞はテレイオオー。この語は名詞のテロス（終わり）の派生語で、「終える・完成する・実現させる・完全なものにする」を意味する。「私が行うようにとあなたが私に与えた業」とは、神の栄光を指し示す「しるし」としての奇跡であり、ことに十字架という業を指していると思われる。ヨハネは十字架のイエスが死の間際に「成し遂げられた」と言って、息を引き取ったと述べているからである（一九30）。「成し遂げられた」と訳されているのは、動詞テレオーである。テレオーもテロスの派生語であり、テレイオオーと同義である。「業を完成して」は「業を完成したことによって」の意味。

②1節では「子があなたに栄光を与えるようにと、あなたの子に栄光を与えてください」と述べられているが、4節には十字架の業を完成して「私は地上であなたに栄光を与えた」とある。このように、「栄光を与える」という動詞が未来の意味で用いられると同時に、過去形でも用いられるのは、ヨハネ福音書の特徴である。

③13章31節でも、イエスは「今や、人の子は栄光を受けた」（この受動形は動作の主体が神であることを婉曲的に示す神的受動形）と宣言するが、31―32節には「栄光を与える」という表現が四回繰り返される。「人の子は栄光を受けた」に続いて、「神も人の子によって栄光をお受けになった」とある。受難によって神から人の子に栄光が与えられ、それによって人の子から神に栄光が帰せられる。「栄光」が神と人の子の間を行き交う。31節に書かれたこの二つの「栄光を受けた」という表現はいずれも過去時制の受動形である。続く32節でも、神とイエスの間を行き交う「栄光」が書かれている。ここでは未来時制を使っているので、神と人の子の間の「栄光」の相互授受がまだ起こっていないこととして描かれている。

④この時制の不一致は、ヨハネ福音書の特徴と密接に関係している。ヨハネにとって「人の子イエス」は物語のどの時点をとっても、すでに「栄光にあげられたキリスト」でもある。十字架以前の「人の子イエス」の中にも「栄光にあげられたキリスト」の姿

が映し出されている。この箇所でも、事件の起こった時点に基準を置くと、十字架とその栄光はまだ未来のことになる。しかし、福音書を書いている時点から見ると、それはすでに実現した出来事である。父はイエスの生涯を通してイエスの栄光を現し、イエスは父への従順によって父の栄光を現した。互いに行き交う「栄光」の頂点が十字架に置かれている。

⑤「あなたのもとで」「あなたのもとから」

④ 5節では、父のもとに帰るイエスが「あなた自身のもとで（あなたの御前で）」栄光を与えてくださいと願っている。イエスは受肉以前に、世が造られる前から存在し、「あなたのもとで」栄光を持っていた。その栄光が再び与えられる。

③ 5節には「あなた（自身）のもとで」が2回用いられ、同じ前置詞による句、「あなたのもとから」が7―8節に2回用いられており、5―8節を囲い込む形となっている。「世の中からあなたが私に与えた人々」は、「あなたが私に与えたすべてのものはあなたのもとからある」こと、「あなたのもとから私は出て来た」ことを知っている。

② イエスは神が父であることを啓示し、その「名」、つまり神の本質を明らかにした。神の名を現された人々は、「あなたの言葉を守っている」。「言葉（ロゴス）」には「（語られる）事柄・出来事」の意味がある。ここでもこの意味であるなら、彼らはイエスによって語られたこと、イエスが行ったしるしによって明らかにされた神の事柄を大切にしているという意味になる。

① 彼らは、イエスのものはすべて神のもとから出ていることを「知っている」。イエスが神から与えられたことばを人々に「与え」、それを人々は「受け取った」からである。この「ことば（レーマ）」にも「語られたこと・出来事」の意味がある。彼らはイエスが語ることばを聞き、そのことばが出来事となって現れることを見て、イエスが神のもとから出て来た方であり、神が遣わされた方であることを「知り、信じた」。

⑥「私たちが（一つである）とおりに、彼らが一つであるように」と

④ ここでの「彼ら」はイエスの直弟子たちである。イエスは彼らのために「聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください」と祈る。彼らは世に残されるが、世は彼らを憎んでいる。なぜなら、イエスが「世に属していないように、彼らも世に属していない」（16節）からである。

③ イエスが「彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってください」ことを願う求めるのは、「わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わした」（18節）からである。神がイエスを世に遣わしたのは、3章16節に「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が：永遠の命を得るためである」とあったように、世に愛を示すためである。神は背く世を捨て去ることができずに、イエスを遣わして、命への道を示した。イエスの直弟子が世に残されるのは、イエスの業を受け継ぎ、世に神の愛を示すためである。

⑥ イエスは自分が父のもとに行つた後、この世に残される弟子たちは、イエスと敵対し迫害した世との闘いを引き継いで行く。その彼らを父なる神が「守る」ことをイエスは願っている。父と子が一体であるように、弟子たちも一致するように神が守ることによって、弟子たちはこの世との闘いに向かつていく。

⑦ 「あなたが私に与えたあなたの名の中で守る」ことをイエスは願う。「あなたの名を私に与える」とは、キリストが神を完全に啓示したことを意味する。

#### ⑦ 大祭司の祈りの構成

⑧ ヨハネ福音書17章は「大祭司の祈り」と呼ばれることがある。ヘブライ人への手紙は、弱さを持った人間にすぎない大祭司は、いけにえを「毎日」献げなければ罪の赦しをもたらすことができないけれども、「罪人から離され、もろもろの天よりも高くされている大祭司」は「ただ一度、御自身を献げる」ことによって罪の赦しをもたらしたのであり、イエスは人間を神にとりなすために死んだ、と述べている（ヘブ7 26以下）。ヨハネ福音書17章では、このような大祭司キリスト論が論じられているわけではないが、イエスが人間のために神にとりなす祈りであるという観点から、「大祭司の祈り」と呼ばれたのだと思われる。

⑨ 新共同訳はヨハネ17章を三つの段落、1—5節と6—19節と20—26節とに分けている。20節以降を新しい段落としたのは、イエスの祈りの対象が直弟子から、直弟子の「言葉によってわたしを信じる人々」に移行していることに注目したからだと思われる。このように、段落分けの基準を「祈りの対象となる相手」に置くのであれば、第二段落は、9節の「彼ら（＝直弟子）のためにお願いします」から始まると見ることが出来る。確かに、6節「世から選び出してわたしに与えてくださった人々に……」から直弟子についての説明が始まるが、ここでの直弟子は、イエスの祈りの対象というよりは、イエスを通して働く神の栄光の具体例と見るべきだと思われるからである。これが正しければ、「大祭司の祈り」の構成は、三つの段落（1—8節、9—19節、20—26節）に分けて考えることができる。

⑩ 第三段落（20—26節）では、直弟子の宣教活動によってイエスを信じることになった人々のために、イエスは「あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください」と祈る。第一段落で「知り、信じた」のはイエスの業と言葉に触れた直弟子であったが、第三段落では「世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります。…わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを、世が知るようになります」というように、「世」が主語になる。イエスの直弟子もかつては世に属していたが、「今は」イエスが誰であるかを知って、世に属さない者となった（第一段落）。彼らは「世」に残されて、イエスの使命を受け継ぐことになる（第二段落）。こうして、世は直弟子と同じ道をたどり、「知って、信じて」世から離れることになる。イエスが父から遣わされたのは、世を捨て置くことのできない父の思いを現すため、「世を世でなくす」ためである。